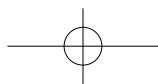


嵯峨院跡発掘調査報告書

2024年

特定非営利活動法人平安京調査会



嵯峨院跡発掘調査報告書

2024年

特定非営利活動法人平安京調査会

例 言

- 1 本書は京都市右京区嵯峨観空寺明水町 37・61・62番地で実施した、嵯峨院跡発掘調査報告書である。(京都市番号 23S030)
- 2 調査は宅地開発に伴い実施した。
- 3 現地調査は中央住宅販売株式会社より特定非営利活動法人平安京調査会(以下、「平安京調査会」という)に委託され、辻 純一・吉崎 伸が担当した。
- 4 調査期間は令和 6 年 3 月 29日から 4 月 18日である。
- 5 面積は 208㎡である。
- 6 本文・図中で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図(縮尺 1:2,500)「大覚寺」を調整して使用した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.(東京湾平均海面高度)である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆・編集は辻が行った。
- 10 現地の記録写真撮影は吉崎が行い、出土遺物の実測は平尾 政幸、撮影は九鬼 みづほが行った。
- 11 調査にかかる資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は以下のとおりである。
〔発掘調査〕 辻 純一・吉崎 伸(平安京調査会)
作業員 櫻井 文彦・友重 文彰・小野寺 健・北尾 拓真
〔整理作業〕 株式会社コンピュータ・システム
- 13 出土遺物の年代観は、平尾 政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年
- 14 現地調査、整理作業においては鈴木 久男氏(京都産業大学日本文化研究所)・平尾 政幸氏から御教示、御協力をいただいた。記して感謝いたします。

目 次

第 I 章	調査の経緯	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査経過	1
第 II 章	位置と環境	4
1	位置と環境	4
2	既往調査	5
第 III 章	遺構	6
1	基本層序	6
2	遺構	6
a)	南北朝初期～前半期の遺構	6
b)	南北時代後半期の遺構	11
第 IV 章	遺物	13
1	遺物概要	13
2	土器類・瓦類	13
第 V 章	まとめ	16

図 版 目 次

図版 1	遺構	1. 調査地から南を望む(北から)
		2. 調査地から大覚寺を望む(西から)
図版 2	遺構	1. 第 1 面全景(ドローンにて真上から)
		2. 第 1 面全景(北から)
図版 3	遺構	1. 堀 1 (南から)
		2. 堀 1 (西から)
図版 4	遺構	1. 土坑 55(南から)
		2. 土坑 27(東から)
図版 5	遺構	1. 土坑 27(南から)
		2. 土坑 27南西拡張部(南から)

- 図版 6 遺構 1. 建物 19(北西から)
2. 柵列 6・溝 13(東から)
- 図版 7 遺構 1. 柵列 6 門跡(東から)
2. 土坑 17(東から)
- 図版 8 遺物 土器類
- 図版 9 遺物 土器類・瓦類
- 図版 10 遺構 土器類 1. 堀 1 出土遺物
2. 土坑 17 出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図(1:2,500)	1
図 2	調査経過写真	3
図 3	周辺調査区配置図(1:5,000)	4
図 4	堀 1 実測図(1:50)	6
図 5	北壁・西壁断面図(1:100)	7
図 6	遺構平面図(1:200)	8
図 7	土坑 55・27 実測図(1:50)	9
図 8	柵列 6・建物 19 実測図(1:50)	10
図 9	土坑 17 実測図(1:50)	11
図 10	出土土器実測図(1:4)	13
図 11	出土瓦拓影・実測図(1:4)	14

表 目 次

表 1	遺構概要表	12
表 2	遺物概要表	14
表 3	遺物観察表	15

第 I 章 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

調査地は、京都市右京区嵯峨観空寺明水町 37・61・62 にあたり、周知の埋蔵文化財包蔵地である嵯峨上皇の離宮「嵯峨院跡」に該当する。ここに住宅造成が計画され、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という。）が対象地内で試掘調査を実施したところ、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構が検出され、それら試掘調査成果を基に文化財保護課から発掘調査の指導により、特定非営利活動法人平安京調査会（以下、「平安京調査会」という。）が発掘調査を実施することとなった。

嵯峨院跡における発掘調査回数としては 11 回となる。

2. 調査経過

調査地点は、大覚寺の西隣に位置し、周辺ではいくつかの発掘調査が実施されている。このうち、当地の直ぐ東隣で行われた発掘調査（調査 10）では遺構面が 2 面あり、平安時代後期から中世にかけての柱穴、井戸等の遺構を多数検出している。

今調査でも調査 10 の成果を踏まえると共に試掘成果から、平安時代後期から室町時代の遺構の検出を主たる調査目的とした。

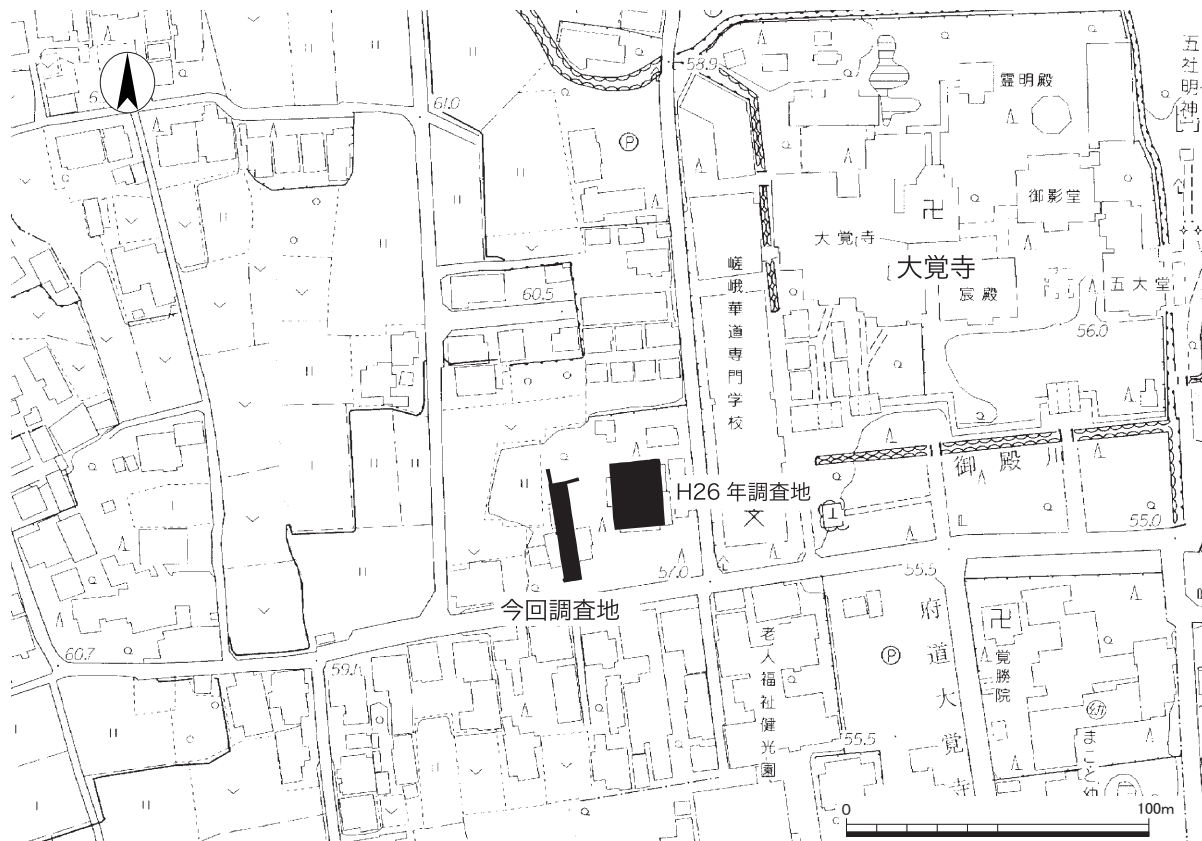


図 1 調査位置図(1 : 2,500)

発掘調査区は、道路敷設部分に当たる東西6m、南北33mを設定し調査を行ったが調査区北端で堀を検出したため、保護課の指導によりその規模を確認すべく1.2m幅で北に5m、東に4m及び土坑27南西部を西側に1m拡張した結果、面積は208㎡となった。

調査は令和6年3月29日に調査範囲の設定を行うと共に、調査機材などの搬入を行なった。夕方、文化財保護課の調査範囲確認を終えた。翌30日に重機掘削を開始し夕方に終了した。同時にコンピュータ・システム株式会社により発掘調査基準点2点を設置した。4月1日より人力による調査を進めた。調査の進捗に従い、検出遺構ならびに平面実測・断面実測などを記録した。写真撮影については、4月10日に調査区全景写真撮影と共に個別近景写真撮影を行った。同時にドローンによる平面実測用の撮影も行い、その画像によりオルソ図及び平面実測図を作成した。また、調査の過程についても必要に応じ写真撮影を行い記録した。調査完掘時には京都市文化財保護課の検査を受け、検証審査員である京都産業大学日本文化研究所・鈴木久男氏に現地にて調査説明を行うと共に指導を受けた。その後、西及び北壁を断割し、断面図の作成をおこなった。最終的に京都市文化財保護課の検査時に調査区北端で出土した堀1の規模を確定させるよう指導があり、原因者の許可を得て拡張を行い精査しそれぞれの遺構規模を確定させ各々平面図及び断面図を補足した。同時に重機による埋め戻しを行い、令和6年4月18日に埋戻しを完了し全ての調査を終了した。

また、調査期間中の4月12日には、近隣住民の方に対する発掘調査現場の公開を行い、見学者に出土遺構や遺物の説明をおこなった。参加人数は計60名であった。(当日40名、次週に見学依頼があり20名が追加見学された。)



1. 調査区設定



2. 重機掘削



3 遺構検出風景



4. 遺構検出後の検査



5. 検証審査員の検査



6. 文化財保護課の最終検査



7. 近隣現場公開



8. 調査終了埋戻し後

図2 調査経過写真

第II章 位置と環境

1. 位置と環境

調査地点は史跡大覚寺の西隣に位置する。嵯峨野の地は平坦に見えるものの、北側の山麓から流れ出る瀬戸川、有栖川、御室川が形成した扇状地や洪積台地が広がる緩斜面となっており、調査地も洪積台地上に位置する。扇状地や台地上は高燥で、灌漑を行わなければ水田を営むことは難しい場所といえ、秦氏が築いた葛野大堰によって灌漑され開発が進んだ地とは異なり、調査地周辺は平安時代にいたるまでほとんど開発が及んでいないことが、天長5年(828)頃の成立とされる「山城国葛野郡班田図」に「野」の表記が多いことから理解できる。このため、周辺地は遊猟や別業の地として利用される余地が十分に残されていた場所といえる。

地形的には西北から南東に向けて傾斜があり、調査区内だけをみても敷地西北端と東南側の道路東端とでは、約2mの高低差がある。この傾斜面を利用するためには籬壇的な地形造成を行う

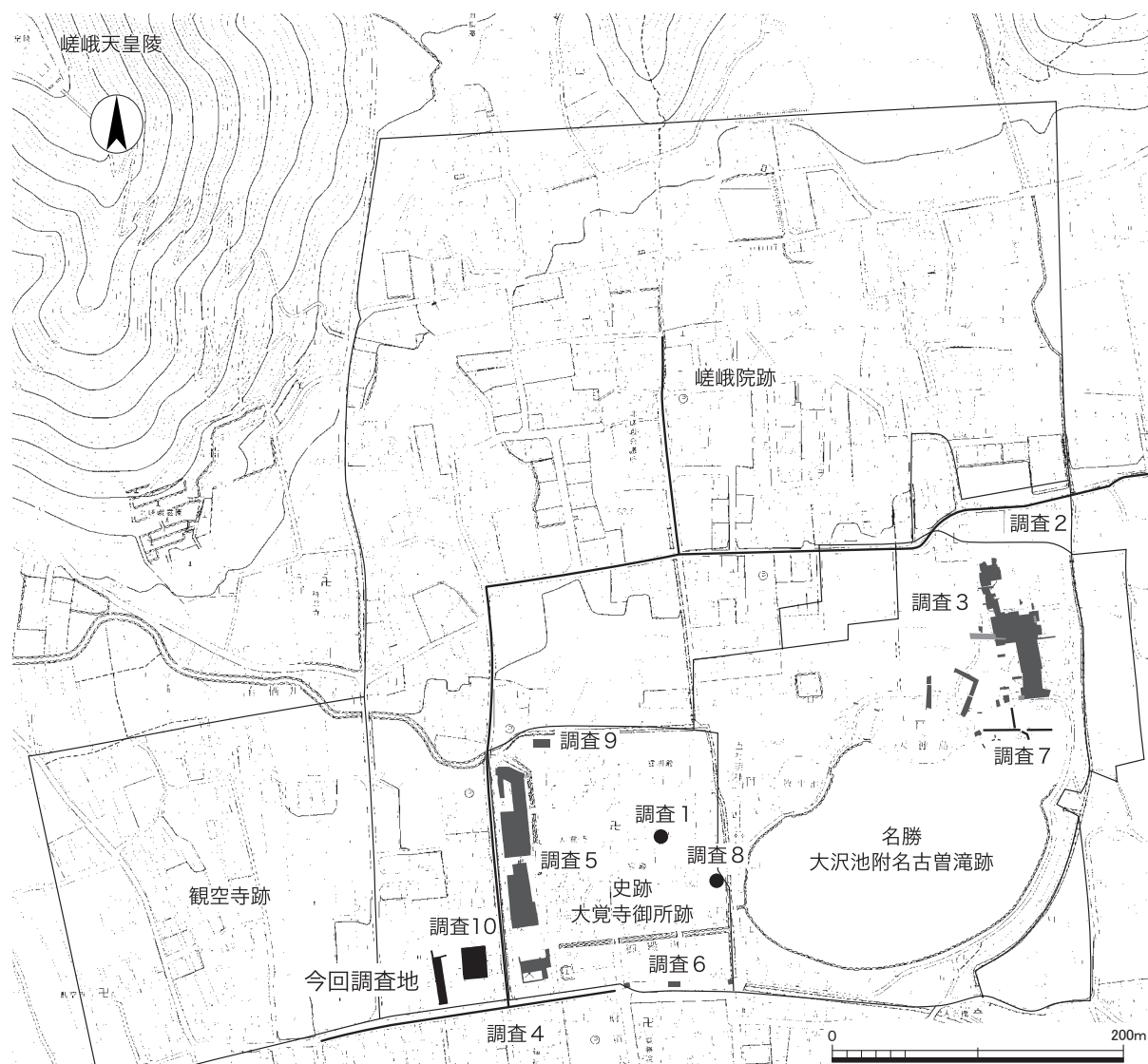


図3 周辺調査区配置図(1:5,000)

必要があったと思われる。ちなみに、今調査地と東隣の調査 10 では夫々の調査区中央は約 25m の隔たりしかないが、最終遺構面（地山面）の標高は 0.4 ～ 0.5m 今調査地のほうが高い。

2. 既往調査

嵯峨院跡は、過去 10 回の調査が行われている。大半が大覚寺境内でのものであるが、今調査との関わりは大覚寺境内の西端での調査と今調査の東隣の調査が重要になる。嵯峨院としての調査次数を年代順で言えば、前者が調査 5、後者が調査 10 となる。

調査 5 大覚寺境内南西隅の信徒会館（現華道芸術学院）新築工事に伴う発掘調査である。調査区北側では平安時代前期の池状遺構、掘立柱建物、中世の柱穴群が多数確認されていることに対し、南側では平安時代と中世の有栖川旧流路、南端で中世の南北溝が確認された程度である。

調査 10 今調査地の東 15m の地点での調査である。遺構面が 2 面あり、平安時代後期から中世にかけての柱穴、井戸等の遺構を多数検出している。平安時代後期には、大覚寺の寺勢は若干衰えていた時期にもかかわらず多くの柱穴があり建物があったと思われるが、調査区内では残念ながら復元することはできなかった。鎌倉時代から南北朝時代にかけては、大覚寺に後宇多院が入り再興が進む時になり、調査地についても引き続き遺構、遺物が豊富で活発な土地利用が認められる。しかしながら、室町時代後期に至ると遺構、遺物が激減し再び生活の痕跡が認められるのは近世後半に至ってからのようである。

これらの成果から、嵯峨院関連の遺構は大沢池より北部に想定され、調査周辺の嵯峨院推定地西南部は鎌倉時代後期、特に後宇多上皇が大覚寺を御所とし入寺、大覚寺門跡となった頃から活発化するようである。

注 1 「史跡大覚寺御所跡」『平成 3 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年

注 2 「嵯峨院跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 26年度』京都市文化市民局 2015年

第三章 遺構

1. 基本層序 (図5)

調査地敷地の全体的な地形は北西から南西に低くなる。その敷地の東西中央の中心から南に33mのトレンチが設定された。調査区の北端は標高58.7m、南(調査区南端より北1m)は58.2mを測り、そこから南に一段下がり敷地南端は標高57.6mとなる。

基本層序は現代盛土、旧耕土、床土、地山(2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥)となる。一部には旧耕土・床土と地山の間を畔と思われる10YR4/4 褐色砂泥がある。旧耕土、床土は近年造成のため盛土をした段階で乱されたようで存在しないところも多い。地山面は調査区南・北端ともに地表下0.5mであり、調査区南北33mに対し南が0.5m 標高が下がる地形となる。

2. 遺構

遺構は2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥層(地山)上面で検出した。遺構総数は66基である。平安時代後期から江戸時代までの遺構はあるが、まとまりのある時期としては南北朝時代の初期から前半期と後半期との2時期に分けることができ、他の時代の遺構はまとまりを持たず、形状としてもぎつちりとしたものは少なかった。

a) 南北朝時代初期～前半期の遺構

この時期と考えられる遺構には堀1・土坑55・建物19・土坑27がある。

堀1(図4) 調査区北隅で北壁に沿うように東西方向の堀を検出した。調査区北端の検出のため検出時は堀幅が西端約1.4m、東端約0.9m、深さは西端で0.5m、東端で0.2mであり、東端より西0.9mで約0.3m低くなる。南肩は直角に近い角度で落ちる。堀は北方向及び東西方向に調査区外へ延びる。埋戻し前に南北幅及び東部の状況を知るため、幅1.2mで北に5m、幅1.0mで東に4m拡張したところ、北2.8mのところを地山面を検出し堀の南北規模が4.0mと判明した。北肩は約40°の傾斜で北から南へ下がることも判明した。東側は拡張した範囲まで堀が続くと思われたが東1.2mの地点で地山となり、そこで堀が止まることが判明した。結果、堀の規模は南

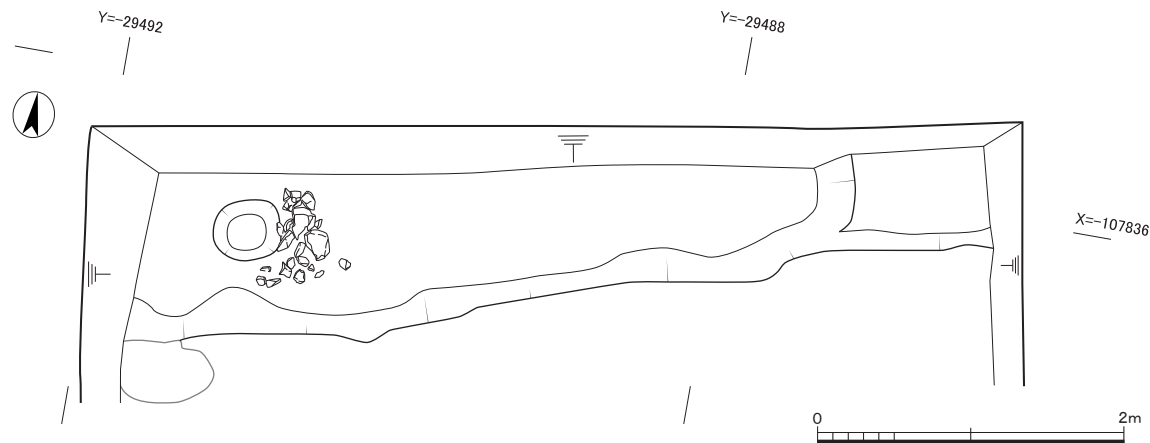
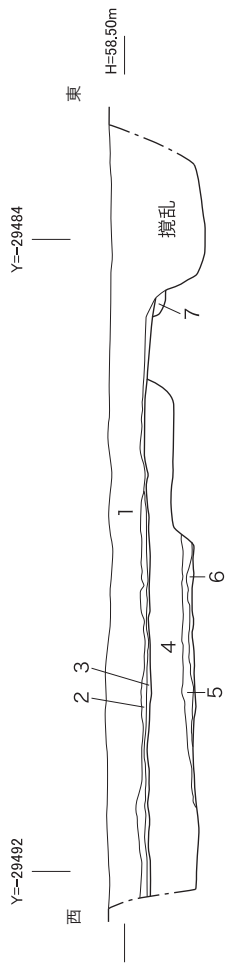


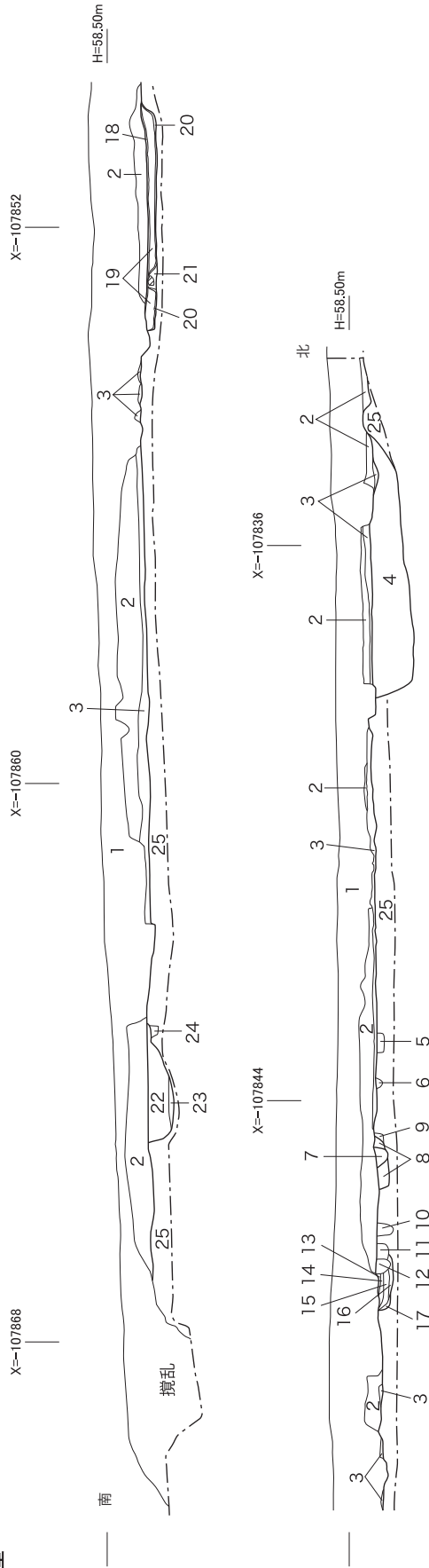
図4 堀1実測図(1:50)

北壁



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(旧耕土)
- 3 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 4 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (堀 1)
- 6 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 7 10YR3/4 暗褐色砂泥

西壁



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(旧耕土)
- 3 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 4 10YR3/4 暗褐色砂泥(堀 1)
- 5 10YR3/4 暗褐色砂泥(ピット 61)
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥(ピット 62)
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥(溝 12)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥(溝 13)
- 9 7.5YR4/4 褐色砂泥(ピット 63)

- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 12 7.5YR4/4 褐色砂泥
- 13 7.5YR3/2 黒褐色砂泥
- 14 10YR3/4 暗褐色焼土
- 15 10YR3/1 黒褐色炭層
- 16 10YR4/4 褐色砂泥
- 17 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土坑 17)

- 18 10YR1.7/1 黒色砂泥
- 19 10YR4/4 褐色砂泥
- 20 10YR2/1 黒色砂泥
- 21 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 焼土と灰のブロック混
- 22 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (土坑 48)
- 23 10YR4/2 灰黄褐色砂泥
- 24 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 25 2.5Y4/2 暗灰黄色(地山)



図 5 北壁・西壁断面図(1:100)

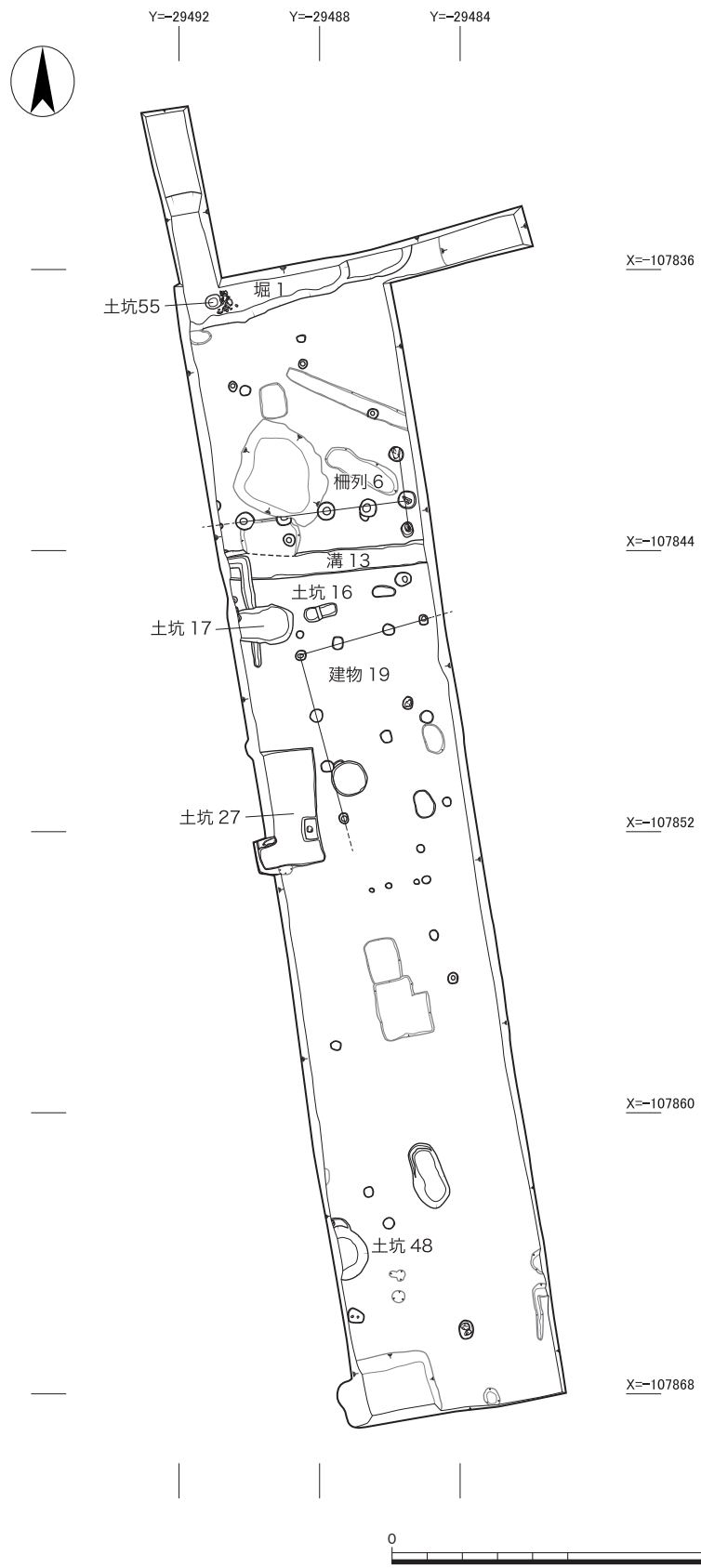


図6 遺構平面図(1:200)

北 4.0m、東西幅は最終検出幅が 6.8m で西に延びることが確定した。埋土は 10YR3/4 暗褐色砂泥である。

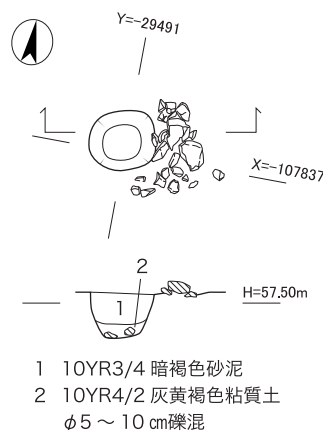
堀 1 南肩部の方位は約 $253^{\circ}17'$ ($-16^{\circ}43'$) であった。この堀からは 5B 時期からの遺物が出土しているが大半は 7B ~ C のものである。出土量の割には完形品が多い。堀が掘られてそれほどの時期を置かずに埋められた可能性がある。

土坑 55 (図 7 上) 堀西部の底部で土坑 55 を検出した。径 0.3m の円形でその東側に石が円に沿うように並んでいた。井戸があったものを掘削時に底面以下は撤去せずに残したと思われる。出土遺物は数点で残存状況も悪いが 7B のものであると思われる。堀掘削時に破壊され底部が埋められた可能性が高く、埋まったのが堀掘削時だと考えられる。

建物 19 (図 8 下) 調査区中央付近で東西 3 間、南北 3 間分の柱穴を検出した。東西柱穴列の柱間は東から 1.05m、1.45m、1.13m、南北柱穴列の柱間は北から 1.75m、1.47m、1.56m を測る。その柱穴も規模は小さく約 0.3m の円形もしくは隅丸方形で 2 個の柱穴を除けば遺構深度も浅かった。建物自体の規模は不明で南・東側に延びるのかは不明である。建物の方位は東西柱穴列が座標北から約 $252^{\circ}52'$ ($-17^{\circ}8'$)、南北柱穴列は約 $-15^{\circ}13'$ を測る。遺物はほとんど出土しなかったが、方位が堀 1 に近く、堀 1 と同様の時期と判断した。

土坑 27 (図 7 下) 調査区中央の西壁沿い、建物 19 東西柱穴列の西隣で検出した。東西 1.8m、南北 3.3m を測り長方形を呈する。深さ約 0.15m で壁は直立に近い。底部全体に炭が約 0.01m の厚さで敷かれている状況で壁面にも敷かれていた。土坑の南 2/3 の位置に西・東壁から粘土質の土で盛上げた上に大きめの平らな石を土坑の東西に据え付けている。盛上げた土にも炭が敷かれていた。建物 19 の西側南北

土坑55



土坑27

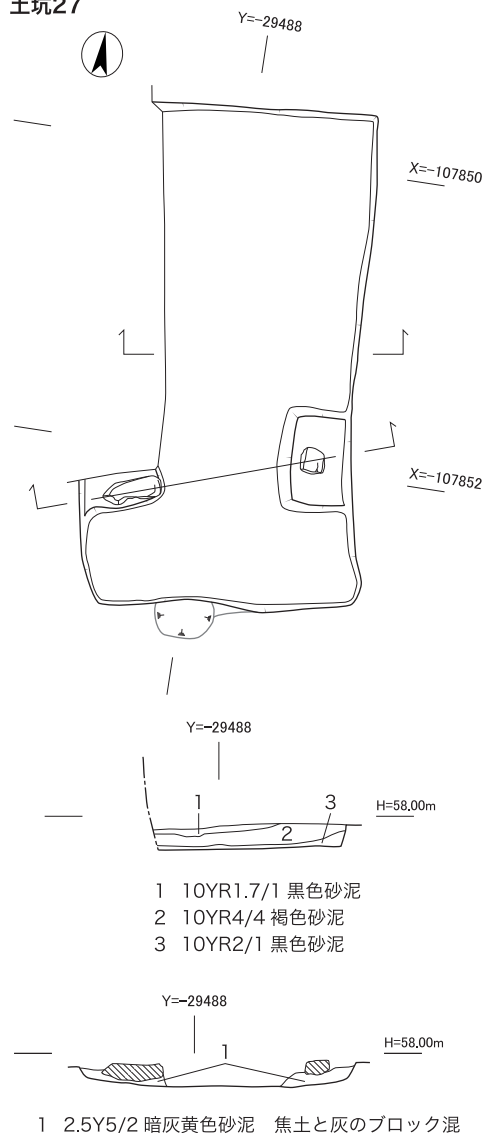
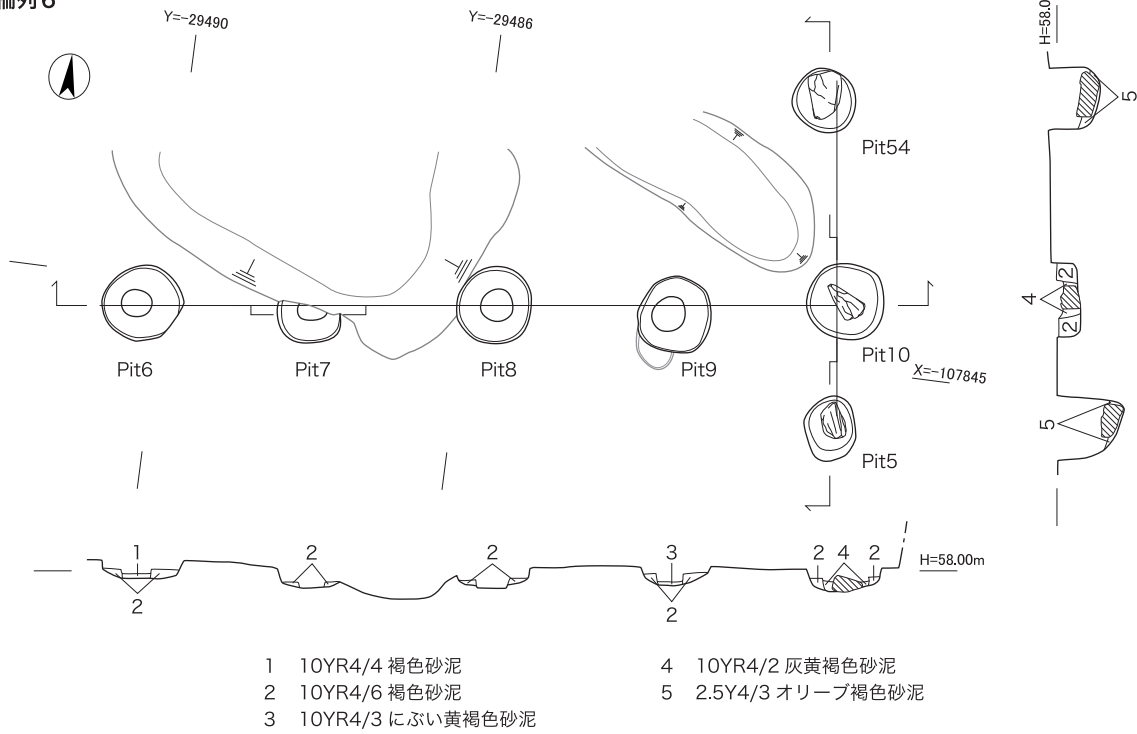


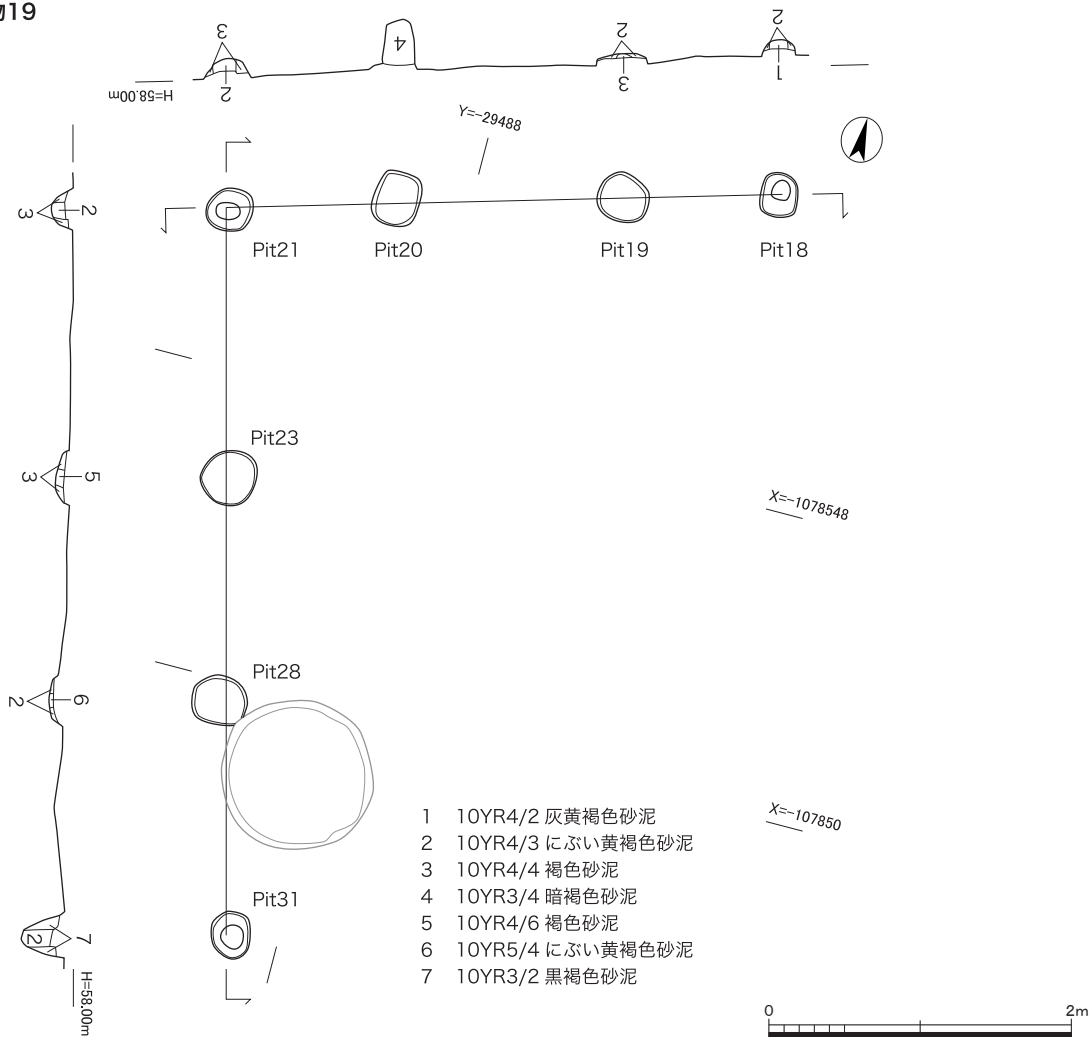
図7 土坑 55・27実測図(1:50)

柵列6



- | | |
|--------------------|--------------------|
| 1 10YR4/4 褐色砂泥 | 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 |
| 2 10YR4/6 褐色砂泥 | 5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | |

建物19



- | |
|--------------------|
| 1 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 3 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 4 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 5 10YR4/6 褐色砂泥 |
| 6 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |
| 7 10YR3/2 黒褐色砂泥 |

図8 柵列6・建物19実測図(1:50)

柱列と同じ方向で石が据え付けられていることから、建物に付属する施設とも考えられるが土坑全体の方位とは異なっている。土坑 27 の埋土は底面に 0.01m の灰層があり、それを 10YR4/2 灰黄褐色砂泥で埋められ、その上面を再び灰で覆っている。土坑の性格については根菜類の貯蔵施設との見方もあるが資料不足のため不明としておく。出土遺物は 5B のものがあるが、新しい時期のものとして 7C がある。

b) 南北朝時代後半期の遺構

この時期と考えられる遺構には柵列 6・溝 13・土坑 17 がある。

柵列 6 (図 8 上) 調査区北部で検出した東西に 5 個の柱穴、4 間分を検出した。東から 4 個目の柱穴は攪乱で北部の大半が破壊されており、南縁部を残すのみであった。柱穴の規模は 0.5m 前後の円形を呈するもので、一番西端の柱穴には根石が残っていた。ただ、その柱穴も浅く約 0.15m で上部が削平を受けていると思われる。柱穴の柱間は東から 1.19m、1.14m、1.16m、1.19m を測る。いずれも柱間は短いものである。埋土は掘方が 10YR4/6 褐色砂泥で、柱当部が 10YR4/2-4/4 灰黄褐色～褐色砂泥を呈する。柵列の方位は座標北から約 262°54' (-7° 6') を測る。柱穴からは遺物の出土がなかった。

柵列と直行する形で、東端の柱穴(地下式礎石を持つ)の北側と南側で柱穴を検出している。両柱穴共に地下式礎石を持つものであった。北側の柱穴は径約 0.4m の円形で深さ 0.3m である。柵列東端の柱穴との柱間は 1.35m を測る。南側の柱穴は北側と同様に径 0.4m の円形で深さ約 0.3m である。柵列東端柱穴との柱間は 0.82m を測る。両柱穴共に埋土は 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥である。調査区東側を拡張しておらず対応する柱穴が存在するのかは不明であるが、3 柱穴とも地下式礎石を持つこと、柵列と直角方向にあることなどから柵に付随する門と考えられる。両柱穴とも遺物がほとんど出土しなかった。

溝 13 柵列 6 の南約 1m で、溝 13 を検出した。幅は南北約 0.7m で深さ 0.1m を測る。埋土は 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥である。調査区外の西東に延びる。柵列 6 と一体のものと考えている。この 2 つの遺構が土地を南と北に限る施設と思われる。この溝からの遺物出土量も小片で乏しいが赤系の土師器皿があり 8B と思われる。溝 13 の方位は約 264°26' (-5°34') を測る。

土坑 17 (図 9) 調査区西壁、溝 13 の南約 0.8m で検出した土坑である。南北幅は約 1.1m、東西幅は検出面で 1.55m を測り西側に延びる。深さは約 0.2m である。埋土

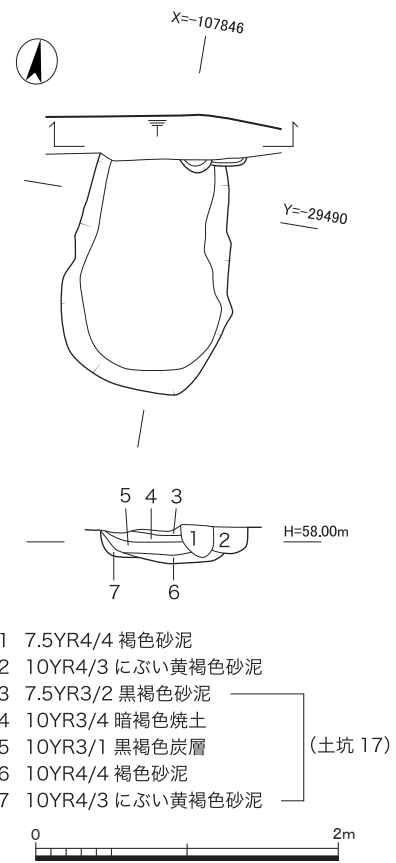


図 9 土坑 17 実測図 (1:50)

中央に灰がレンズ上に堆積していた。埋土は5層あり、上から 7.5YR3/2 黒褐色砂泥・10YR3/4 暗褐色砂泥・10YR3/1 黒褐色炭層・10YR4/4 褐色砂泥・10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥である。この土坑からは 8A～B の遺物がまとまって出土した。土坑 17 の方位も柵列 6 や溝と同様で約 263° (-7°) である。

柵列 6・溝 13・土坑 17 は位置的に近く、方位も座標北に対し約 - 7° でほぼ揃っていることから同時期の遺構と判断した。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	概 要
南北朝初期～前半期	堀 1、建物 19、土坑 27、土坑 55	
南北朝後半期	柵列 6，溝 13、土坑 17	

第IV章 遺物

1. 遺物概要

遺物は、遺物コンテナで3箱出土した。その内容は土師器・瓦・瓦器・磁器・陶器があるが、そのほとんどは土師器である。時代別では平安時代中期から江戸時代までの遺物が出土しているが、大半は南北朝時代のもので、他の時代のもものは時期の違う遺構に伴って出土したり少量の出土にとどまっている。

2. 土器類・瓦類 (図10・11、図版8・9・10)

南北朝初期～前半期

堀1出土土器(図10、図版8) 土師器、須恵器、緑釉陶器、白磁、陶器などが出土した。土師器には皿S(1～6)、皿Ss(7)、皿Sh(8～11)がある。皿Sは口径11.4～11.7cm、器高2.6～2.9cm(1～3)と口径8.0～8.1cm、器高2.0～2.1cm(5～6)および口径6.5cm、器高1.9cmの3種類がある。5・6に内面内部に赤褐色の付着物が認められた。皿Ssは口径7.5cm、器高1.8cmである。皿Shは口径6.2～7.0cm、器高1.8cm(7～11)である。8は底部中央の押上げがゆるい。陶器には古瀬戸の灰釉鉢(12)がある。時期は7B～C段階である。

土坑55出土土器(図10、図版9) 少量の土師器が出土している。図化できるものは1点のみであった。土師器皿S(24)で口径11.6cm、器高2.8cmである。時期は7B段階である。

土坑27出土遺物(図10、図版9) 土師器、陶器、軒丸瓦、軒平瓦が出土した。土師器には

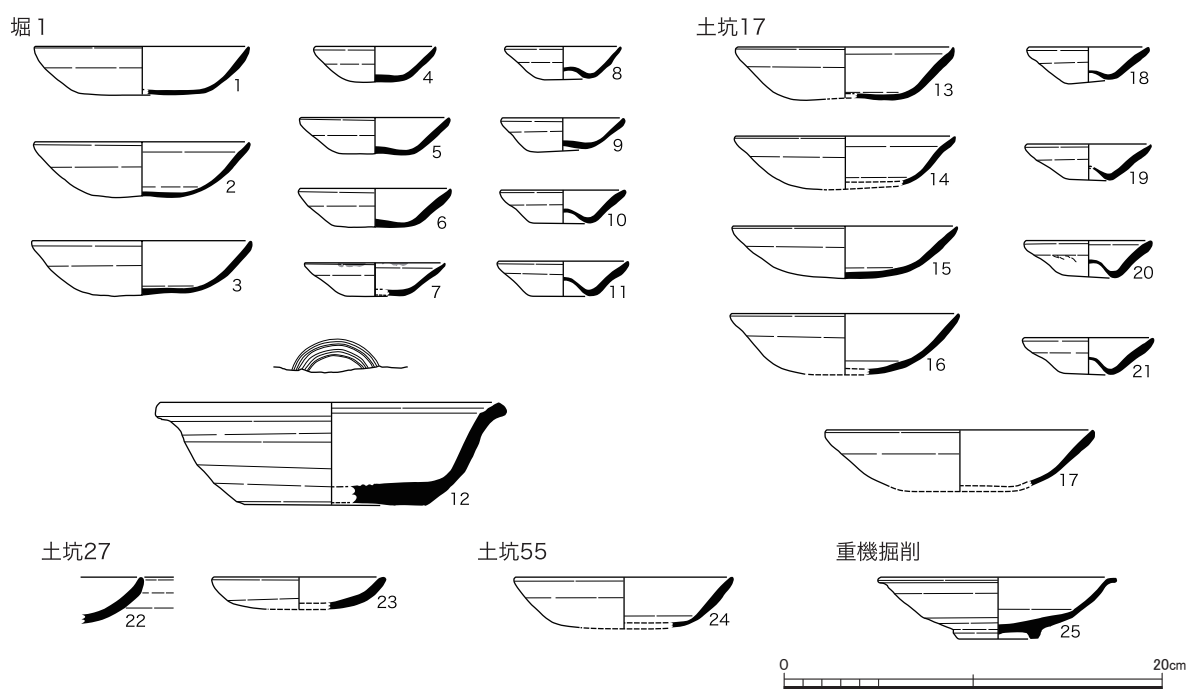


図10 出土土器実測図(1:4)

皿 N (22・23) のみで、22 については小片であり口縁部のみの図化にとどまる。23 は口径 9.2cm、器高 1.2cm である。軒丸瓦 (26・27) は共に巴文で瓦当径は 10.2 ～ 10.5cm である。軒平瓦 (28) は剣頭文で残存幅は 5.8cm である。時期は土師器の年代から 7B ～ C 段階である。

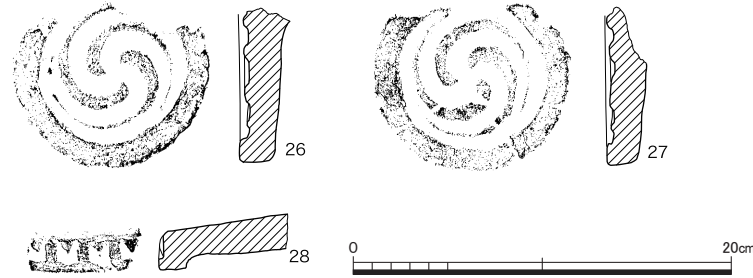


図 11 出土瓦拓影・実測図(1:4)

南北朝後半期

土坑 17 出土遺物 (図 10、図版 8・9・10) 土師器のみの出土であった。皿 S (13～17) と皿 Sh (18～21) がある。皿 S (13～16) は口径 11.6～12.2cm、器高 2.8～3.2cm と口径 14.3cm (17) の 2 種類がある。皿 Sh は口径 6.5～7.0cm、器高 1.9～2.0cm である。時期は 8A 段階である。

その他、遺構検出中に唐津の灰釉皿 (25) が出土した。口径 12.6cm、器高 3.3cm である。

註 1 平安時代の土師器皿の型式・年代については、平尾 政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 年に準拠した。

表 2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
平安時代中期	緑釉陶器・須恵器				
鎌倉時代	土師器・瓦器・軒丸瓦・軒平瓦		軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点		
南北朝初期～前半期	土師器・瓦器・白磁・陶器		土師器 14 点、陶器 1 点		
南北朝後半期	土師器		土師器 9 点		
江戸時代	土師器・陶器		陶器 1 点		
合計		4 箱	28 点 (1 箱)	0 箱	3 箱

表3 遺物観察表

番号	遺構	種類	器形	口径	器高	色調・胎土	備考
1	堀1	土師器	皿S	11.4	2.6	10YR8/3	器表摩滅
2	堀1	土師器	皿S	11.5	2.9	10YR8/3 精良	
3	堀1	土師器	皿S	11.7	2.9	10YR8/2 精良	
4	堀1	土師器	皿S	6.5	1.9	2.5YR8/3 精良	
5	堀1	土師器	皿S	8.0	2.0	2.5YR8/2	内面に赤褐色の付着物
6	堀1	土師器	皿S	8.1	2.1	10YR8/3	内面に赤褐色の付着物
7	堀1	土師器	皿Ss	7.5	1.8	10YR8/3	器表摩滅 口縁部に灯芯痕
8	堀1	土師器	皿Sh	6.2	1.8	10YR8/1	口縁歪み大
9	堀1	土師器	皿Sh	6.6	1.8	10YR8/2 チャート粒混	
10	堀1	土師器	皿Sh	6.7	1.8	10YR8/2	器表摩滅
11	堀1	土師器	皿Sh	7.0	1.9	10YR8/3 石英・チャート粒混	
12	堀1	古瀬戸	灰釉鉢	18.6	5.4	胎土 10YR8/3 釉 5Y7/3 ~ 7.5Y6/3	釉は刷毛塗り 焼成良好
13	土坑17	土師器	皿S	11.6	2.8	7.5Y8/4 赤色粒少混	
14	土坑17	土師器	皿S	11.7	2.8	7.5Y8/2 赤色粒少混	
15	土坑17	土師器	皿S	12.0	2.8	5YR8/4 精良	
16	土坑17	土師器	皿S	12.2	3.2	5YR8/3 精良	
17	土坑17	土師器	皿S	14.3	残3.0	7.5Y7/3 赤色粒混	器表摩滅
18	土坑17	土師器	皿Sh	6.5	2/0	7.5Y8/4 赤色粒少混	
19	土坑17	土師器	皿Sh	6.7	1.9	7.5Y8/4 赤色粒少混	
20	土坑17	土師器	皿Sh	6.8	2.0	7.5Y7/3 石英・赤色粒混	
21	土坑17	土師器	皿Sh	7.0	2.0	7.5Y7/3 赤色粒混	
22	土坑27	土師器	皿N	-	残2.5	10YR8/3 チャート粒混	チャート粒混
23	土坑27	土師器	皿N	9.2	1.2	2.5Y8/2 細粒	一部炭素吸 10YR5/1
24	土坑55	土師器	皿S	11.6	2.8	10YR8/2	やや軟質
25	重機掘削	唐津	灰釉皿	12.6	3.3	胎土 2.5Y7/2 釉 5Y6/1 全体に褐色の小斑	
26	堀1	軒丸瓦	巴文	瓦当径 10.2		10YR7/3 チャート角礫混	焼成軟質
27	堀1	軒丸瓦	巴文	瓦当径 10.5		10YR7/4 チャート角礫混	焼成軟質
28	堀1	軒平瓦	剣頭文	残幅 5.8		N5 ~ 6/0	焼成良 硬質

第V章 まとめ

以上、今回の発掘調査における調査成果を示した。調査では2時期の遺構群があることがわかった。各遺構の出土遺物、遺構の方位などから1時期目は遺物の年代7B～C段階のややB寄り、2時期目は8A～B期のややAよりとなり、1時期目の方位は北が西に約16°振れ、2時期目の方位は北が西に約7°振れるものとなっている。

1期目の遺構群には堀1、建物19、土坑27がある。時代的に14世紀初～中頃までと考えられる。この時期は後宇多上皇が大覚寺を院の御所とし入寺、次々と伽藍の造営に努め「大覚寺殿」と称され大覚寺の中興とされた。同時に皇位が皇統や所領の継承をめぐる2分され、亀山・後宇多の皇統は、後宇多法皇が大覚寺に住したことにより大覚寺統（南朝）と称されることとなる。それに対し後深草・伏見天皇の皇統は伏見上皇が持明院殿（北朝）と称される邸宅を継承し子孫が持明院殿に住むようになったことにより持明院統と称された。この両統が交互に天皇を即位させていく両統迭立が成立していくことになる。それは伏見天皇が永仁6年（1298年）に皇太子胤仁（10歳、後伏見天皇）に譲位したが、次の皇太子の人選をめぐる大覚寺統の巻き返しが起こり、皇太子には後宇多天皇の第1皇子邦治親王（14歳）が指名された。伏見は引き続き政務を執ったが政権は安定せず、正安3年（1301年）、幕府は上皇・天皇の交替を要求し、邦治（17歳、後二条天皇）が踐祚して後宇多による院政が開始された。両統迭立が鎌倉幕府（最高権力者は得宗北条貞時）の公式な方針として表明されたのは、この交替のときが最初である。以後滅亡まで幕府はこの方針を堅持した。ただ、このことが王家の分裂を固定化することとなり、南北朝の騒乱に発展していくことになると共に鎌倉幕府滅亡にもつながっていく。

一期目の遺構群はこの時期と一致し、後宇多上皇による大覚寺発展とその後の争乱期への移行期にあたるもので、周囲の調査でも同様にこの時期には活発な活動状況がうかがえる。堀1は争乱に備えるために造られた防御用の堀の可能性も考えられる。

この時期の遺構の方位は座標北から堀1の南肩で約-16°44'、建物19の東西方向柱列は約252°52'で南北報告柱列は約-15°13'を測る。建物19東西方向の振れを90°東に振ると座標北からは約-17°8'となり、それら3方向の平均値は座標北から約-16°21'となる。この数値は従来から言われている山城国葛野郡班田図の条里プランは約16°西傾するのとは一致する。この条里プランは平安時代初期に成立し、周辺の正方向プランとは違い、微地形に合わせて作られたものとされている。

二期目の遺構群には柵列6とそれに関連する門跡、溝13、土坑17がある。これらは遺物の年代観から南北朝時代終末期と思われる。元中9年（明徳3年・1392）、南北朝講和が大覚寺正寢殿で行なわれ、南朝の後亀山天皇が北朝の後小松天皇に三種の神器を譲って大覚寺に入った。この一時の平和な時期に調査地周辺でも再度活動の時期を迎えたともいえる。当調査区内では溝と

並行して北側に塀があり、それに門が付くようなものが想定される。溝の南側には土坑があり、土坑は中央がくぼんだ形の炭層を検出した。どのような性格のものかは不明であるが土師器皿を中心に一定程度の遺物が出土している。調査面積が狭く全容を知ることは難しいが周辺調査との関連から人々の活動の姿を捉えることが出来そうである。

この時期の遺構方位に関しては柵列 6 が座標北より約 $262^{\circ}54'(-7^{\circ}6')$ 、溝 13 が約 $264^{\circ}26'(-5^{\circ}34')$ 、門が約 $-7^{\circ}59'$ を測る。大雑把に言うと座標北より約 7° 西に振れるといえよう。これは宇多野嵐山山田線(京都府道 29 号)から大覚寺に至り西に直角に折れる大覚寺平岡線(京都府道 136 号)の方位とほぼ一致する。

応永 17 年(1410)、後亀山上皇の吉野出奔以後、南朝の再興運動が起こり、大覚寺もこの運動に深く関わっていくようである。活発化はその影響ともいえる。

その後、応仁 2 年(1468) 応仁の乱により大徳寺のほとんどの堂宇が焼失してしまうと同時に、当地も停滞期を迎えるようで、顕著な遺構がなく、遺物も出土しなくなる。

江戸時代に入り、再び人の生活が始まったようであるが、検出される遺構や出土する遺物の量的なものからはそれほど活発なものとはいえない。

最後に、今調査地と 2015 年に行われた東隣の調査 10 とは東西約 20m の隔たりしかないにもかかわらず、地山面の高さが 0.3 ~ 0.4m ほど今調査地のほうが高い。但し、調査 10 ほど遺構密度は高くないことや調査 10 では確認されている平安時代後期の包含層も遺構もない。

調査場所の敷地北西端と南東端では標高で約 2m ほどの差があり北西端から南東端に向けて低くなる地形を呈していたと考えられ、それを籬壇式に造成して生活面を形成していたと考えられる。それが近代になってある程度切土と盛土で高さ調整をした段階で今調査地は上面を削られたと考えられ、調査 10 での調査成果よりも遺構密度も遺構の時代幅も限定的なものとなった可能性がある。

また、南北朝前半期と後半期では方位の使われ方が違っている。方位から見た場合、南北朝前半期までは平安時代初期に造られた葛野郡条里の方位を使っていたが、その後大覚寺造営時に使われた方位へと変わっていくと思われる。そうであるならば、南北朝前半期まではあまり大覚寺に影響を受けなかったが、その後大覚寺に影響を受けだすとも捉えられ、調査場所の地名に残る観空寺との関連が気になるが筆者の実力ではそこまで及ぶことはできない。

本来はどのような地形であり、それを南北朝時代にどのように替えていったのか? 調査地の地名に残る観空寺跡がどこにあり、どの規模でどれほどの勢力があったのかなど、解明すべき事柄はまだ多い。今後の考古学的調査の発展に期待する。

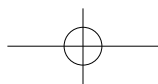
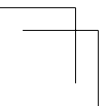
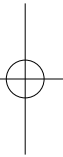
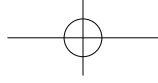
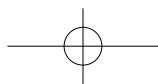


图 版





1. 調査地から南を望む（北から）



2. 調査地から大覚寺を望む（西から）



1. 第1面全景（ドローンにて真上から）



2. 第1面全景（北から）



1. 堀1 (南から)



2. 堀1 (西から)



1. 土坑55（南から）



2. 土坑27（東から）



1. 土坑27 (南から)



2. 土坑27南西拡張部 (南から)



1. 建物19（北西から）



2. 柵列6・溝13（東から）



1. 柵列6門跡（東から）



2. 土坑17（東から）

図版 8 遺物 (土器類)



図版9 遺物（土器類・瓦類）





1. 堀1出土遺物



2. 土坑17出土遺物

報告書抄録

ふりがな	さがいんあとはつちょうぎほうこくしょ							
書籍	嵯峨院跡発掘調査報告書							
シリーズ名	特定非営利活動法人平安京調査会発掘調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	辻 純一							
編集機関	特定非営利活動法人平安京調査会							
所在地	〒603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号							
発行所	特定非営利活動法人平安京調査会							
発行年月日	2024年6月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さがいんあ 嵯峨院跡	きょうとしうきょうくさが 京都市右京区嵯峨 かんくうじみょうずいちょう 観空寺明水町 37・61・62番地	26100	858	35度 01分 39秒	135度 40分 37秒	2024年 3月29日 ～ 2024年 4月18日	208㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
嵯峨院跡	離宮跡	南北朝時代初期 ～前半期	堀・建物・土坑	土師器・瓦器・ 白磁・施釉陶器		防御用堀や建物、土坑をほ ぼ山城国葛野郡条里方向 と同一の振れを持って検出 した。		
		南北朝時代 後半期	溝・柵列・土坑	土師器・瓦・陶器		大覚寺と同一の振れを持つ 柵列・溝・門跡・土坑を 検出した。		

嵯峨院跡発掘調査報告書

編集・発行 特定非営利活動法人平安京調査会
〒 603-8042 京都市北区上賀茂狭間町9番地3号
TEL 075-334-5680
<https://heiankyo-tyousakai.com>

コンピューター・システム株式会社
〒 602-8453 京都市上京区笹屋町4丁目273番3
TEL 075-462-5411
<http://www.comsys-kk.co.jp>

発行日 2024年6月30日